みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

アラスカ先住民イヌピアックとホッキョククジラの関係の歴史的変化

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸上, 伸啓 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4595

〔フォーラム：人と動物をめぐる地理学・地域研究の現在〕

アラスカ先住民イヌピアックとホッキョククジラの関係の歴史的変化

岸 上 伸 啓

I はじめに

広大なツンドラ地帯が広がっている北アメリカの北方地域では，考古学的には少なくとも4000年前に人類が生活を営んでいたことが知られている。彼らの子孫は，極端に寒冷な気候に適応し，地元の海獣や陸獣，植物などを活用することによって世代を重ねてきた。とくに極北地域の先住民の特徴のひとつは，海獣と陸獣など多種の動物を食料資源としてや衣類や道具を製作する原材料として利用したことであった。

極北地域の先住民と動物の関係は，5つに大別することができる。第1は，資源として利用の対象となる動物で，極北民にとっては捕獲対象となる動物である。第2は，使役動物や牧畜用動物である。北アメリカの極北民にとっては，イヌと一時的であったがトナカイがそれに該当する。第3は，ワタリガラスのように直接的な関係はないが，神話の中に出てきたり，知識として知っていたりする動物である。第4は，存在は知っているが，まったくかほとんど利用しない動物である。第5は，観賞用や愛玩用の動物である。極北地域においてペットが出現したのは最近の現象である。極北民と動物の関係は，多様であり，かつ時間的にも変化してきた[1)]。

アメリカ合衆国アラスカ州北西沿岸地域に住むイヌピアックは，紀元後1000年ごろからホッキョククジラを捕獲し，食料資源や道具を製作するための原材料として利用してきた。この捕鯨を通してイヌピアックは，ホッキョククジラと特別な関係を形成している。本稿では，その関係の特徴と歴史的な変化を報告する。

II アメリカ合衆国アラスカ北西地域の先住民社会における捕鯨の歴史と現状

ホッキョククジラ（以下，クジラと略称）は成獣で体長が約15メートル，体重が約50トンに達する巨大な海棲哺乳類であり，季節的に回遊する。クジラの体の70%は食料資源などに利用することができる。

アラスカ沿岸で紀元後1000年ごろに捕鯨を経済基盤とするチューレ文化が発生し，それ以降，アラスカ北西地域の海岸地域では捕鯨が生活の中心として営まれ，独特な社会組織や儀礼が形成された[2)]。その文化が大きく変化せざるをえなくなったのは，19世紀半ばにおけるベーリング海や北極海における欧米人による商業捕鯨の開始であった。クジラを乱獲した結果，クジラ資源は枯渇化し，1914年には最後の捕鯨船が北極海を去った。1848年から1914年の間に1万8千頭以上のクジラを捕獲したと推定されている[3)]。

商業捕鯨の時代が過ぎ去った後も，イヌピアックらは捕鯨を継続した。すでに1931年から国際捕鯨協定によってホッキョククジラの捕獲は全面的に禁止されていたが，イヌピアックらの捕鯨には「先住民適用除外項」が適用されてきた。しかし，1977年にはクジラの資源量が少ないとして，国際捕鯨委員会はイヌピアックらの捕鯨を禁止しようとした。この動きに対してアラスカのイヌピアックは，ユピックとともにアラスカ・エスキモー捕鯨コミッション（AEWCと略称）を結成し，アメリカ合衆国政府の協力をえて国際捕鯨委員会に対し，政治的な働きかけを行い，1978年には年間12頭の捕獲もしくは18回の銛打ちの許可を得た。国際捕鯨委員会の総会で5年ごとに審議のうえで，捕獲頭数を決めるようになった。また，AEWCはアメリカ合衆国政府の海洋大気庁（NOAAと略称）とクジラ資源の共同管理を開始した。

2008年の時点で報告者の調査地であるバロー村には約55組の捕鯨グループが存在し，クジラが村の近くを回遊する春と秋に捕鯨に従事している。この捕鯨は，国際捕鯨委員会のもと先住民生存捕鯨として年間あたりの捕獲頭数に制限が課せられたうえで，実施されている。しかも，クジラの肉や皮脂は現金で売買される

ことはなく，むしろ捕鯨のためには現金を投資しなければならない。捕獲したクジラの肉や皮脂は，ルールに従って関係者や村人に分配されるとともに，ナルカタック祭やクリスマス，感謝祭の村全体の祝宴で消費されている。捕鯨と獲物の分配・消費は，現在のイヌピアックにとっても重要な社会・文化・経済・政治的な活動であり続けている。[4]

III　イヌピアックとクジラの関係の特徴とその変化

イヌピアック社会では，動物と人間の社会関係が世界観や生業活動において重要な役割を果たしていることが知られている。[5] 沿岸地域に住むイヌピアックにとってクジラは特別な存在であり，特殊な関係を形成してきた。このため，彼らは独特なクジラ観を持つようになり，彼らとクジラの関係を維持させるために，さまざまな対応を行ってきた。

(1)イヌピアックのクジラ観[6]　イヌピアックは，遠くからクジラは人間の話を聞いたり，人間の行動を見たり，においをかいだりする能力を持っていると信じている。しかも彼らは，クジラはよい人間とわるい人間を識別することができ，クジラはよい人間のために自ら意図的に命をささげると信じている。イヌピアックにとって，クジラは捕るための対象ではなく，特定の人間に捕られるためにやってきてくれる存在である。[7]

イヌピアックの人々は，クジラが特定のハンターに捕獲されにやってくるのは，そのハンターの妻にひきつけられるからだと考えている。クジラをひきつけるハンターの妻（女性）は，ほかの人々に対して寛大でかつ，適切な行動をとる人間だと考えている。このように捕鯨においては，女性（ハンターの妻）は，クジラをひきつけるという儀礼的な役割を果たす。[8] そして捕獲後にハンターが，霊魂（イヌア）が宿るとされているクジラの頭部を海中に戻すと，そのクジラが再生し，ハンターの妻がほかの人々に対し寛大に振舞うかぎりは，同じハンターのもとに再び捕られるために戻ってくると信じられている。

このため，イヌピアックは捕鯨をたんに獲物を捕獲するための物理的な活動ではなく，聖なる活動であると考えている。[9]

(2)イヌピアックの対応　イヌピアックは，クジラと適切な関係を保つためには，やるべきことややってはならないことがあると考えている。[10]

a．伝統時代のイヌピアックの対応　1950年代にアラスカ北西地域で調査に従事したR.スペンサーは，古老とのインタビュー調査によって過去を再現している。彼は，イヌピアックがクジラとの関係を維持するためにさまざまなタブーやお守り，歌などを持っていたことを報告している。[11]

春季捕鯨に出る前の4日間は，ハンターはカリギと呼ばれる集会場に集まり，厳粛な雰囲気の中で過ごしたという。その期間中は，軽はずみな言動や性的な交渉は許されず，クジラについて考えつつ，静かに座って過ごした。また，メスのアザラシの心臓やカリブーの骨髄，メスのアゴヒゲアザラシの肝臓を食べることはタブーとされた。また，月経中のハンターの妻たちは，カリギに入ることが禁止されていた。

捕鯨のために海氷上でキャンプ中には，火を使用することや料理することは許されなかった。また，狩猟中には，ボートキャプテンの妻は，家の中にとどまることが期待された。彼女は，縫い物をすることや地下貯蔵庫に入ること，家に身をかがめながら入ることが禁止されていた。

捕鯨に成功したボートキャプテンとその妻は，クジラに真水を飲ませ，捕獲されに来てくれたことに対して感謝の念を述べ，翌年も戻ってきてくれるように祈願した。さらにクジラの肉や皮脂，内臓などを独占することなく，村人や捕鯨組のクルーや助けてもらったほかの捕鯨組のクルーに寛容に分配しなければならなかった。

また，クジラを近くに呼び寄せるお守りや銛打ちをスムーズに行うためのお守り，網が外れたり，絡んだりしないためのお守りをハンターは所持し，捕鯨のあらゆる段階で狩猟活動を成功させるための歌を歌ったという。

b．現代のイヌピアックの対応　2009年の時点でもイヌピアックの人々は，クジラに対して特別な対応をとっている。ボーデンホーンや筆者によるバロー村での調査を中心に紹介してみよう。

クジラは，汚い貯蔵庫の中を嫌い，汚い貯蔵庫を持つハンターとその妻にはクジラは近づかないといわれている。このためボートキャプテンは，捕鯨のシーズ

ンが始まる前に，残り物を取り出し，掃除し，底に氷雪を敷いて，きれいにしなければならない。また，残っていた肉や皮脂は欲しい村人に分与し，貯蔵庫を空にしなければならない。

汚れた狩猟道具をもつハンターのもとにはクジラは近づかないので，捕鯨に使用する狩猟道具はつねにきれいにしておく必要がある。また，クジラは血の色である赤色を嫌うので，ウミアックに乗り込むハンターは白色のコートを着込む習慣がある。

クジラは，攻撃的な人間や争いの多い人間を嫌うので，人々はできるかぎり争いを避けたり，クジラに脅威を与えるような言動は避けたりしなければならない。たとえば，クジラを捕りに行くという直接的な表現ではなく，「海に行く」などといった婉曲的な表現を用いるべきであるとされている。

クジラは，だれが適切な行動をとり，よい人間であるかを知っている。したがって，日ごろからボートキャプテンとその妻は，とくに言動に注意する必要がある。たとえば，クジラは，獲物を独占するハンターやその妻を嫌うため，ハンターも妻もつねにほかの人々に寛大に接し，肉や皮脂を分与する必要がある。

クジラを引き寄せる力があるとされるハンターの妻，とくにボートキャプテンの妻は，狩猟中はゆっくりと動かなくてはならない。さらに平和的な考え方をもち，寛容に振舞わなければならない。[12]

クジラの霊魂は頭部に宿るので，海に戻すとその霊魂はクジラの姿に再生し（クジラのパーカを着て），同じハンターのもとに戻ってくると信じられている。このため，クジラを捕獲し，解体した後は，頭部を海中に戻すべきだとされている。[13]

このようにイヌピアックは現在でもクジラに対して特別な考えを持っており，捕鯨に従事する人々の間では特別な言動がみられる。

(3)イヌピアックとクジラの関係とその変化 1000年以上にわたる捕鯨の歴史を通して培われてきたイヌピアックとクジラの関係とは，捕獲する側と捕獲される側からなる関係ではない。イヌピアック社会では，人間の食料となるために身を投げ出すのはクジラの方であり，捕獲したクジラに感謝の念をささげながら儀礼的な処置をし，再生させるのは人間の方である。この関係は，生と死の循環を基調とするクジラと人間の間の互酬的な関係といえよう。

このイヌピアックとクジラの特殊な関係は，基本的に現在でも継続しているが，この100年余りの間にいくつかの変化が起こった。第1の変化は，イヌピアックが20世紀に入りキリスト教を受容したため，クジラを彼らに遣わしているのは，キリスト教の神であると考えるようになり，クジラとともに神に対して感謝の祈りをささげるようになった。また，スペンサーが報告しているように，かつては捕鯨に関して多数のタブーやお守り，捕鯨を促進させる歌が存在していたが，キリスト教の影響下でほとんどが消失してしまった。[14]

第2に，グローバル化や国民化の進展によって，イヌピアックが多様な経済活動に従事するようになり，生活様式も多様化しつつある。このような社会変化の中で，捕鯨はすべてのイヌピアックがかかわる活動ではなくなりつつある。一部のイヌピアックにとっては，クジラは観光資源や保護の対象になったり，クジラの皮脂は食べても，肉を好まない若者も出現したりしている。

第3に，クジラとの関係や捕鯨は，米国という国家の中に取り込まれている少数先住民族イヌピアックを他の人々から区別するエスニック・シンボルとしても機能しているといえよう。現代のイヌピアット社会においては，クジラや捕鯨活動は対外的な政治資源となっている。

このように歴史的に形成されてきたイヌピアックとクジラの関係は変化しつつある。

IV 結　　語

イヌピアックはクジラを特別な存在であるとみなし，互酬性に基づく象徴的な社会関係を形成してきた。インゴールドは，狩猟民と捕獲の対象となる動物の関係は信頼関係であると指摘している。[15]この指摘は，極北の捕鯨民イヌピアックにも当てはまるといえよう。

しかしながらその関係は，キリスト教の受容やイヌピアック社会の社会経済構造や食生活の変化によって大きく変化しつつある。さらにその関係の変化は，実践の変化を通して，歴史的に形成してきたイヌピアックの世界観を変化させつつあるといえるだろう。

現時点では，イヌピアックにとってクジラは，第1のカテゴリーの関係に属しているが，将来的には，第3や第4，第5のカテゴリーの関係が増大していく可

能性がある。その場合には，クジラの民としてのイヌピアック民族の文化的基盤を根本から覆すような社会変化とみることができよう。（国立民族学博物・総合研究大学院大学）

注・

1) 岸上伸啓「北アメリカ極北地域の動物と民族文化―アザラシとカリブー，ホッキョククジラ，犬を中心に―」（池谷和信・林良博編『野生と環境』岩波書店，2008）141-161頁。

2) Spencer, R. B., *The North Alaskan Eskimo : a study in ecology and society,* Dover Publications, Inc., 1976 (1959)., Sheehan, G. W., *In the Belly of the Whale: trade and war in Eskimo Society,* Alaskan Anthropological Association, 1997.

3) Bockstoce, J. R. et al., 'The geographic distribution of bowhead whales, *Balaena mysticetus* in the Bering, Chukchi, and Beaufort seas: evidence from whaling records, 1849-1914', *Marine Fisheries Review,* 67(3), 2005, pp. 1-43.

4) 岸上伸啓「文化の安全保障の視点から見た先住民生存捕鯨に関する予備的考察―アメリカ合衆国アラスカ北西地域の事例から」国立民族学博物館研究報告33-4, 2009, 493-550頁。

5) Bodenhorn, B., "I'm not the great hunter, my wife is": Inupiat and anthropological models of gender', *Études/Inuit/Studies,* 14 (1-2), 1990, pp. 55-74.

6) オクラハマ大学地理学部のサカキバラ・チエ博士は，クジラが人間をどのように考えているかについてイヌピアックの言説をもとにバローやポイント・ホープにおいて調査を実施しているという。

7) Turner, E., 'The whale decides: Eskimos' and Ethnographer's shared consciousness on the ice', *Études/Inuit/Studies,* 14 (1-2), 1990, pp. 39-52., 前掲2）の352頁，前掲5）の61頁。

8) 前掲5）の65頁。

9) 前掲5）の64頁。先住民の生業活動については，次の文献を参照されたい。岸上伸啓「文化人類学的生業論―極北地域の先住民による狩猟漁撈採集活動を中心に」国立民族学博物館研究報告34-4, 2008, 529-578頁。

10) 1960年代以前については，前掲2）の333-339頁。1980年代以降については，前掲5）の61-63頁，前掲7）の43-48頁。

11) 前掲2）の332-346頁。

12) 前掲5）の63頁。

13) 1980年代からこの慣習に従わない捕鯨組が出始めたらしい。また，現在，秋季捕鯨のクジラの頭部や骨は，村はずれの海岸部の土中に埋められている。

14) 前掲2の333-341頁。

15) Ingold, T. 'A manifesto for the anthropology of the north', Sudkemp, A. ed., *Connections : local and global aspects of arctic social systems* (Topics in arctic social sciences 5), International Arctic Social Sciences Association (IASSA) and University of Alaska, Fairbanks, 2005, pp. 61-71.